



Title	象彦にみる京の漆器業の近代化
Author(s)	星野, 祥子
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

象彦にみる京の漆器業の近代化

星野 祥子 滋賀県立大学

はじめに

株式会社象彦は寛文元年（1661 年）に象牙屋として創業し、18 世紀半ばから着手した漆器製造の分野で知られるようになった京都の老舗企業である。歴代の当主はプロデューサーとして顧客からの要望を受け、職人達を束ねて組織的に豪華絢爛な漆器製作を行ってきた。中でも八代西村彦兵衛（1887 年～1965 年）は大正から昭和期に、象彦を日本を代表する漆器製造業に成長させたことで知られており、近代漆工史の中にその名と作品を見ることができる。

象彦の漆工史や意匠に関わる先行研究としては、2011 年の三井記念美術館による企画展『特別展 華麗なる〈京漆器〉三井家と象彦漆器』があり、三井家旧蔵の象彦製漆器と三井家の資料を照合することにより、日本の近代漆工界における象彦の製作活動の一端が初めて明らかになった。しかし本展覧会以後、象彦に関する目立った研究は見られない。

本発表では、明治 17 年（1884 年）から当主を務め、その後の象彦の興隆の礎を築いた六代西村彦兵衛（1864 年～1932 年）の経歴に焦点をあてる。

六代の経歴と業績を詳細に調査することは、明治時代に京の漆工界がどのように発展したかを明らかにする上で貴重な情報を提供してくれると考えられるが、既存の研究では六代の詳細な活動についてはほとんど知られていない。そのため、象彦の当時の資料や六代が残した手記類を対象に、六代がどれだけ交流関係を広げ、象彦の漆器製造業を拡大していったかを調査した。

六代西村彦兵衛の今までの評価と代表作品

六代は風流の人として知られており、近代の京都が文化都市として成長していく時流に乗って、優雅で洗練された京漆器の生産で知られるようになった。明治 40 年（1907 年）の隠居後も作品製作を続けた六代は、「象翁」と作品の箱や作品自体に銘や印章を入れたことから、近代漆工史の中に初めて西村彦兵衛の名が知られるようになった。代表的な作品を挙げると、『大堰川三船御遊蔀絵料紙硯箱 一具』、『嵐峡春秋蔀絵文台硯箱 一具』、『柳橋蔀絵冠卓 一基』などが挙げられる。いずれも著名な故事や和歌が画題となっており、風流な図案に、高度な技法をふんだんに組み合わせ、濃密で豪華な作品となっている。

六代西村彦兵衛の詳細な業績

このように六代は隠居後の作品において評価を得ているが、当主の時代にどのような活動を行ってきたかはほとんど知られていない。六代が漆器商としてどのような業績を上げたのか、国内と海外における活動に分けて見ていく。

国内における特筆すべき業績としては、明治 36 年（1903 年）に大阪で開催された第 5 回内国勸業博覧会である。六代は「柳橋水車図屏風」を意匠化した『蔀絵橋辺楊柳図文台硯箱』を出品し、2 等賞を受賞した。その図案は神坂雪華で、蔀絵は富田幸七であったことが判明しているが未詳の部分が多い。その後、柳橋図は象彦の十八番の主題になったようで、同じテーマで何作か製作されている。先に述べた象翁の代表的作品の冠卓もその

類である。

海外における活動で特筆すべき業績としては、明治26年（1893年）のシカゴ万国博覧会に、六代は京都貿易商組合による臨時博覧会委員に選出され、京都府下の受賞者の中に含まれたことである。他の漆器の受賞者としては、戸畠弥兵衛、三上治三郎、山本利兵衛の名を見ることができる。

このように六代は、明治の美術工芸界の潮流に乗り、当時の殖産興業策に積極的に参加し、海外への展開も行ってきたことがわかる。六代の国内外の業績が、その後の大正・昭和期の象彦の興隆の礎となったと言える。それでは、六代は具体的にどのような交流関係を築いていたのか。

京都の工芸界や画壇、顧客との交流関係

八代の時代になるが、象彦は大正7年（1918年）に、岡崎公園西側の疏水を挟んですぐのところに、豪華な陳列所と製造工場を建設した。当時、岡崎公園は博覧会の会場となっており、京都府の勸業政策の拠点となっていた。そのような中、象彦も商品陳列所を設け、博覧会に訪れた重要顧客に商品を見せ、且つ漆器製作の見学もできるようにした。

西村家には、この岡崎陳列所の新築披露の芳名録が残されているが、ここに京都における八代及び象翁の交流関係を概観することができる。十代西村彦兵衛へのインタビューによると、六代は社会的で旺盛な性格であったということで、隠居後も多分に象彦への影響力を持っていたと推察されることから、この芳名録は象翁の交流関係の集積とも言える。芳名録には、漆器商や蒔絵師などの漆器業に関わる人物だけではなく、織物商、記者、呉服屋、工芸作家、画家、蒔絵師、大学教員、実業家・政治家、千家家元など、当時の京都の美術工芸界や経済界で名を知られた人物を見ることができる。

次に、京都以外の交流関係について、西村家所蔵資料として六代が書いた数十冊の手記が残され

ており、これを調査した。手記は2種類あり、大きな手帳は京都での記録、手のひらに収まるような小さな手帳は各地へ周遊した旅行日記となっている。旅行日記には、いつどこ誰を訪問したのかが記されている。帰京した際の忘備録として活用していたと考えられる。東は東京、西は岡山まで、大阪、和歌山、三重、愛知など、各地の名手として知られる顧客が記されている。東京に於いては、北三井家（総領家）・伊皿子三井家・南三井家・室町三井家など複数の家に入出入りしていただけではなく、三菱財閥の創業家である岩崎家にも訪問していた。その他、宮内省官僚、政治家、実業家、茶人などの錚々たる顔ぶれを手記の中に見ることができた。

六代の手記からは、上流階級の顧客と交流を深める中、漆器の依頼を受けて帰京しては、職人たちに漆器製作を指示し、完成した漆器を納めに周遊を繰り返していた様子を見ることができた。

おわりに

今回の研究では、西村家所蔵の手記などを調査し、明治時代に活躍した六代西村彦兵衛の詳細な活動や交流関係を概観した。六代は、近代化の時流に乗って京の美術工芸界で活躍し、殖産興業策に積極的に参加し海外への展開も行った。一方で、広範囲にわたる京都内外の上流階級との連綿とした交流があった。つまりは、京の美術工芸界で切磋琢磨しながら、顧客からの依頼に応え続けることにより、新しい時代においても優雅で洗練された漆器の生産を続け、明治期の京漆器業の展開に寄与したと考えられる。

（調査に対し、十代西村彦兵衛であり株式会社象彦代表取締役社長である西村毅氏のご協力に感謝いたします。）